

オープン カレッジ

皆さんは朝食をどうして食べるのだろうか。平日は慌ただしく、自宅でも落ち着いて食べることは難しいかもしれないが、週末にはなじみの喫茶店などでゆっくり「モーニング」を楽しむ人もいるのではないだろうか。東海地方の「モーニング」は、それを自当てに訪れる観光客もいるほど人気のある、この地域で育まれた食文化のひとつだ。試しに、インターネットの検索サイトに「モーニング」と入力してみると、おすすめのお店をいくつも紹介してくれる。「モーニング」

ローカルに溶け込む異国

方出身の筆者にとって、なじみのない慣習だった「モーニング」を初めて体験した時、ワクワクしたことを覚えている。

前回は、愛知県は外国人労働者数が東京都に次いで2番目に多く、それに呼応するかのよう、現地さながらのエスニック料理屋が名古屋市内周辺の工業化された地域に点在している、という話題をこちらに寄稿した。異国情緒を味わう目的で訪問してみたらどうかと記したが、このように地元で訪問した店もあつたのだ。ローカル(異国)の食文化と、ローカル(東海地方)の食文化の融合である。世界的な大企業の店舗が地元でオープンした、という大きな話ではない。ごく狭い地域の、小さな店舗で起きていることだ。世界的な情勢に注目することは、もちろん重要である。しかしそこでは見出されないような小さな変化が、私たちの足元では着実に起きているのだ。ローカル×ローカル、草の根的な異文化交流が、「モーニング」という独自の食文化を通して実践されている。

草の根的な グローバル化



愛知淑徳大学助教授
ビジネス学部 野 淑

文化のおかげか、愛知県は朝食の欠食率が全国平均より圧倒的に低い、というデータもあるほどだ。東北地

方々が実践していること。さらに、それを地元の人びとが受け入れ、愛着をもって利用していること。特に、記事にあつたインド料理店の「モーニング」常連客は、長く地元に住む高齢者であり、彼らの要望に応える形で店側は「モーニング」を始めたという。客は、コーヒーではなくチャイを飲み、他の客や店員と談笑し、交流する。提供されているのがインドの飲み物というだ

かんの・しゆく 文化人類学、アフリカ地域研究、名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得後満期退学。1988年生まれ

こうした文化の融合には、双方の歩み寄りが欠かせない。互いに理解し、受け入れる。言うはやすしだが、実際はなかなか難しい。しかし、実例がある。少しずつではあつても、ローカルに溶け込む異国、異文化は、今後も増えていくだろう。